

## 場の再利用と転用 (*Diversion & reuse of site*)

齊藤 基生 *Motonari Saito*  
(美術学部)

### はじめに

「ひと」を知るためには、「ヒト」を研究対象とする自然人類学と、「人」を研究対象とする文化人類学があり、考古学は後者に含まれる。

考古学は物質文化史であり、人と関わるモノやコトを手がかりに、過去人類の文化を明らかにすることを目指している。これまで折に触れ述べてきたが、その対象はあくまでも人類の歴史であり、恐竜など人類登場以前の事柄は原則的に含まれない。また、猿人に始まる化石人骨や貝塚などから出土する人骨も、もっぱら自然人類学の研究者に任せ、考古学者が直接「ヒト」そのものを研究することは少ない。あくまでも、人と関わったことが分かるモノやコトを頼りに研究を進める。

人が作った道具や大地に刻み込まれた生活の痕跡はもちろん、人類誕生以前に生成された岩石や鉱物、時には化石も、人が道具や装身具の素材として選び手にした時点で、考古学の研究対象に取り込まれる。そして、これまた繰り返し述べてきたが、対象とする時代は人類誕生以後であり、文字出現以降もモノを通して非文字の歴史を明らかにする限り、昨日掘られたゴミ穴でさえも考古学の手法で研究できる。

前号では、考古遺物に見られる「転用」の事例を紹介した。本稿では、モノではなく「場」の再利用や転用<sup>(1)</sup>について、事例を紹介しながら考える。なお、日本列島の地形は急峻な山岳や火山、開析の進んだ丘陵が多く、生活に適した平坦な場所が限定される。そのため、異なる時代の遺跡・遺物が同じ場所に重なって残ることは珍しくない。

ここでは、こうした集落址などの生活の場としての再利用ではなく、非日常の「場」の再利用や転用に限定して進める。ただし、後期古墳に見られる「追葬」は継続利用と見なし、除外する。一方、古墳の墳丘が中世の墓域として利用されるのは、両者の間に明らかな時間的断絶があり、「再利用」の良い例である。

### 1 日本考古学における時期区分

まず本題に入る前に、日本考古学における時期区分について概略を述べる。中学や高校の日本史の教科書の多くは、古い方から新しい方に向けて順に、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、歴史考古、とされている。そして、戦後の教育を受けた人の大部分

は、この呼称を特に疑問を抱くこともなくそのまま覚えて使っている。ところが、これらの呼称の命名規準は、まったく統一されていない。

まず旧石器時代、これはヨーロッパで作られた概念である。そもそもは 19 世紀前半、トムゼンが先史時代を利器の素材を元に、石器時代、青銅器時代、鉄器時代と 3 時期に分けたことに始まる。その後 19 世紀半ば、ジョン・ラボックが石器時代を二分する。前半を、絶滅動物と共伴し、更新世に相当する時代、Palaolithic (旧石器時代) と名づけた。後半を旧石器時代に続く磨製石器の時代とした。その呼称をそのまま日本でも採用したものである。なお、ほぼこの時代を指す言葉として他に、先土器時代、先縄文時代、無土器時代、岩宿時代などがある。それぞれの支持者により込められた思いの違いはあるが、ここでは一々触れない。ただ、2000 年 11 月に発覚した、東北地方を中心とする前期旧石器遺跡埋没事件の背景には、「旧石器派」と「先土器派」の確執があったことは間違いない。

次の縄文時代、これは土器の文様に由来する。日本で最初に科学的発掘がなされたのは、モースによる東京都大森貝塚である。そこから掘り出された土器の多くには縄目模様がついており、様々な用語の中から「縄文」に落ち着き、そのまま時代呼称となった。

大森貝塚の発掘以後、日本各地で遺跡の発掘が盛んになり、様々な土器類が出土する。その中で、東京都向ヶ丘の弥生町から出土した土器が、大森貝塚のものと姿形が異なっており、それと類した土器のことを大森貝塚の土器と対比させ、弥生町と似た土器と呼んでいる内に、いつしか時代名にされていった。つまり、弥生時代の弥生とは、地名である。

その次の古墳時代。これは古い、高まりを持ったお墓をそう呼んだことに始まり、高まりを持ったお墓が多い時代を「古墳時代」とした。

そして最後の歴史考古。これは日本列島内に文字が普及し始めて以後の総称である。

もう一度各由来を見ると、旧石器はヨーロッパの概念、縄文は土器の文様、弥生は地名、古墳はお墓、歴史考古は文字の有無と、呼称の規準がまったくバラバラである。果たしてこれで科学的といえるかどうか。多くの研究者が統一した規準での名称の見直しを試みているが、長い時間かかって定着したものを替えるのは難しい。いまだ万人の支持が得られる呼称は、ない。不合理は承知の上で、ここでは従前の呼び方を踏襲していく。

## 2 場の再利用

### 1) 可児市長塚古墳

本古墳は、近接する野中古墳、西寺山古墳と合わせ、「前波の三ツ塚」として広く知られている。以前から墳丘の測量調査が行われており、その結果、墳長 80 m、後円部径 42 m、高さ 8 m、前方部幅 28 m、長さ 39 m、高さ 5.7 m の前方後円墳であることが分かっている。さらに 1996 年 1 月からは、国指定史跡の整備事業に伴う確認調査が実施された。

その調査は、墳丘やその回りに複数のトレンチを入れる方法が取られた。本来の古墳に伴う遺構や遺物の他に、集石と一緒に中世の灰釉系陶器、微量の骨片、常滑産の大甕など

が出土している<sup>(2)</sup>。古墳の墳丘が、中世に墓域として利用されたことを示している。

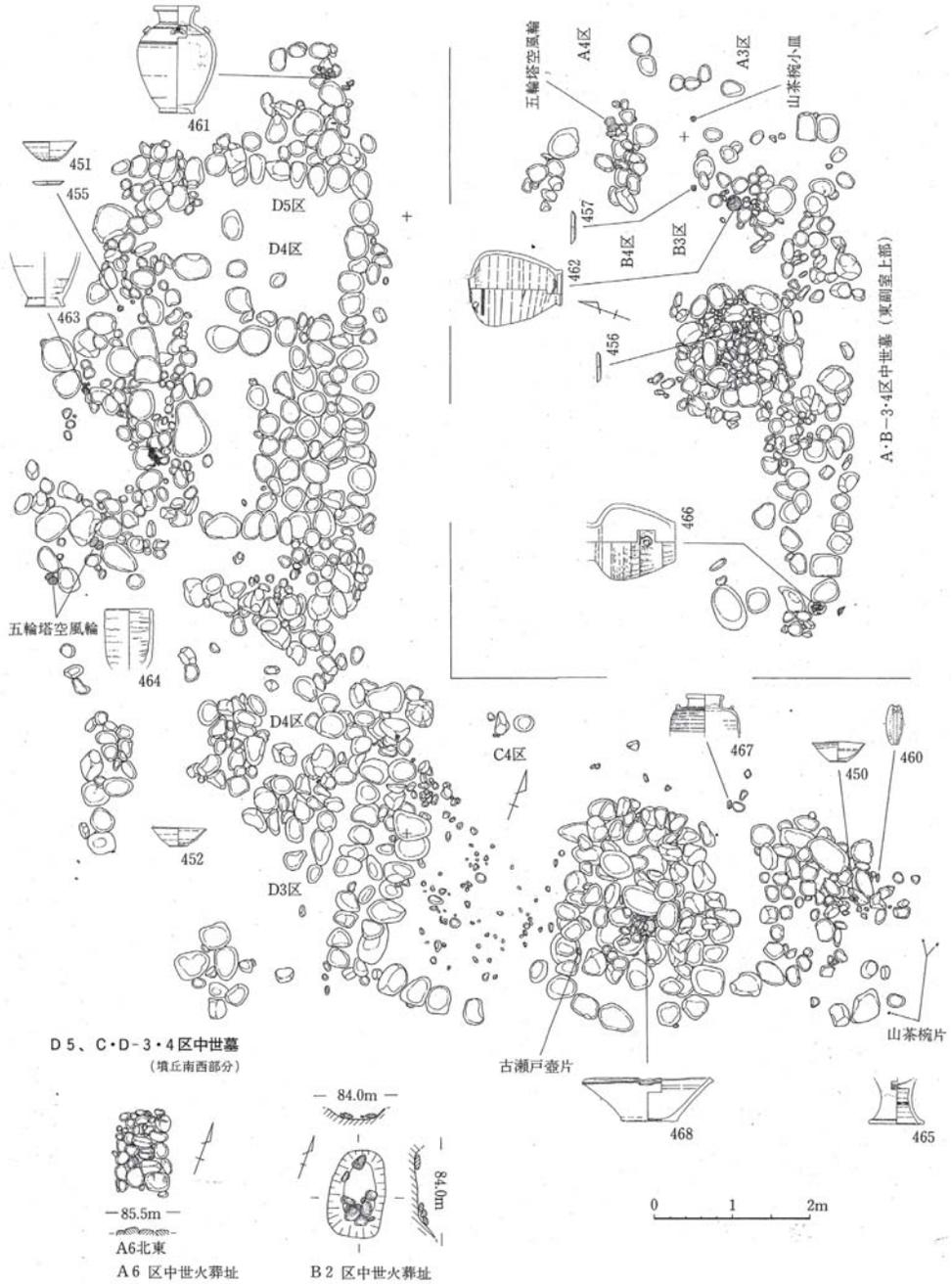


図1 次郎兵衛塚1号墳 中世墓群

## 2) 可児市次郎兵衛塚1号墳

本古墳は、岐阜県可児市川合にあり、大規模な区画整理事業に伴う調査対象として発掘された。当初は記録保存が前提であったが、調査中にその重要性が関係者に理解され、整備保存されることになった。そのため、調査方針も全面的な解体ではなく、極力古墳を傷めない様にし、整備に向けての情報収集に絞られた。

古墳の詳細は本報告<sup>(3)</sup>に譲るが、方形、2段築造、底辺約30m、全面円礫の葺き石で覆われていたと考えられる。その墳頂平坦面を中心に中世墓が、南西部で11～13基、南東側で3～4基検出された。古墳の葺き石が転用された石組みで、一辺3m×2.5m程の方形を呈するものが多い(図1)。先の長塚古墳同様、墓である古墳の墳丘が、中世の墓域として再利用された。

## 3) 御嵩町伏見大塚1号古墳

本古墳は岐阜県可児郡御嵩町伏見にあり、1982年、保育所移設に伴い発掘踏査された。径約30m、高さ2.6mの円墳だが、後世の開発で墳丘はかなり改変されている。調査を進めたところ、墳頂部では葺き石が方形に近い形で並べられ、墳裾には集石遺構が見られた。

これらの事実から調査担当者は、「古墳構築後(おそらく中世)古墳の墳丘自体が信仰の対象あるいは墓域と意識されて、埋葬・土器の供献が行われたことが窺える」<sup>(4)</sup>としている。14世紀代の、四耳壺や常滑の大甕が蔵骨器に利用され、山茶碗が供献されていた。

古墳の築造時期を特定する土器類は出ていないが、内部主体が割石積竪穴式石室であることから、5世紀代中葉を下らないと考えられている。その後、900年程の時を隔てて、墓である古墳の高まりが中世に墓域として再利用されたことを示している。

## 3 場の転用

### 1) 美濃加茂市伊瀬栗地遺跡

本遺跡は、岐阜県美濃加茂市蜂屋町地内にあり、1994年に美濃加茂市教育委員会により発掘調査された。遺跡の性格を述べる前に、調査に至るきっかけとその経過について、概要を記す。

当該地域について開発協議が市教育委員会にあり、その辺りに周知の遺跡はなかったが、念の為現況を確認し一部試掘も行った。特に表面で遺物の散布は見られなかったが、尾根上に一か所「塚状の高まり」が確認されたため、そこを中心に発掘することになる。

調査が始まってほどなく、旧地主さんが現場を訪れ、その高まりは自分がイモ穴を掘った時の排土を盛り上げたものだといわれる。確かにそこにはイモ穴が掘られており、塚状の高まりの断面を見れば排土であることは一目瞭然であった。一時は調査そのものを断念しかかるが、断面をよく観察するとイモ穴の排土の下にかすかな高まりが見られ、かつ、高まりの周辺で弥生式土を思わせる素焼きの土器片や古代の須恵器片が出土していた。

気を取り直し調査を進めた結果、排土の下から弥生時代後期の一辺約10m四方の方形

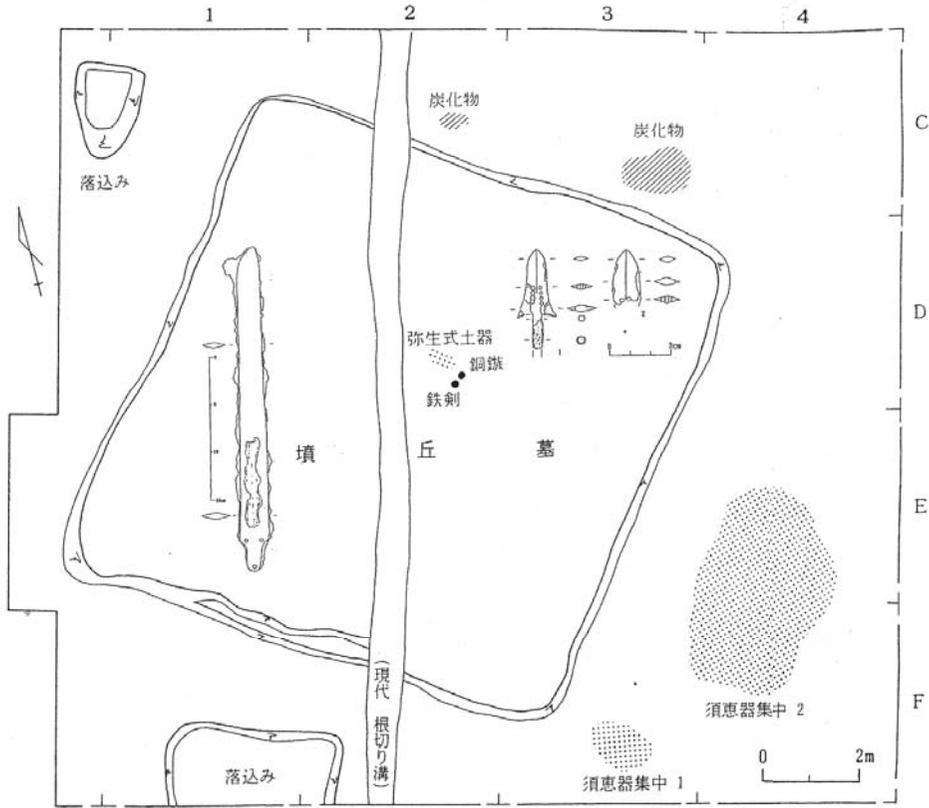


図2 伊瀬栗地遺跡墳丘墓遺構等配置図

の墳丘墓が姿を現してきた。遺骸を納める施設は確認できなかったが、副葬品と思われる銅鏃や鉄剣、土器片類が出土した(図2・3)。そして、須恵器の年代は、6世紀第4四半世紀～7世紀第1四半世紀(図3-4～8)、7世紀第4四半世紀～8世紀前半(同9～13)、8世紀後半(同14)に属するとされた。

この遺跡は、弥生時代後期にまず墳丘墓が作られる。そして300年ほどの空白の後、6世紀から7世紀にかかる頃より、およそ100年間隔で3回、古代の人々が墳丘の高まりを利用して何らかの祭祀を行ったと考えられる。弥生時代と古代の間に血縁や地縁関係は認められないが、古代における100年間隔の祭祀に血縁や地縁の有無を判断するのは難しい。少なくとも、何らかの伝承が共有されていたのではないかと推察される。いずれにしろ、弥生時代に墓として作られた高まりが、古代に祭壇として転用された<sup>(5)</sup>。

## 2) 美濃加茂市池奥古墳群

本遺跡は、岐阜県美濃加茂市蜂屋町池奥に所在した。1995年、ゴルフ場開発が持ち上がる。当該地域内に周知の遺跡はなかったが、近接地に古墳や山城があり、事前に分布調

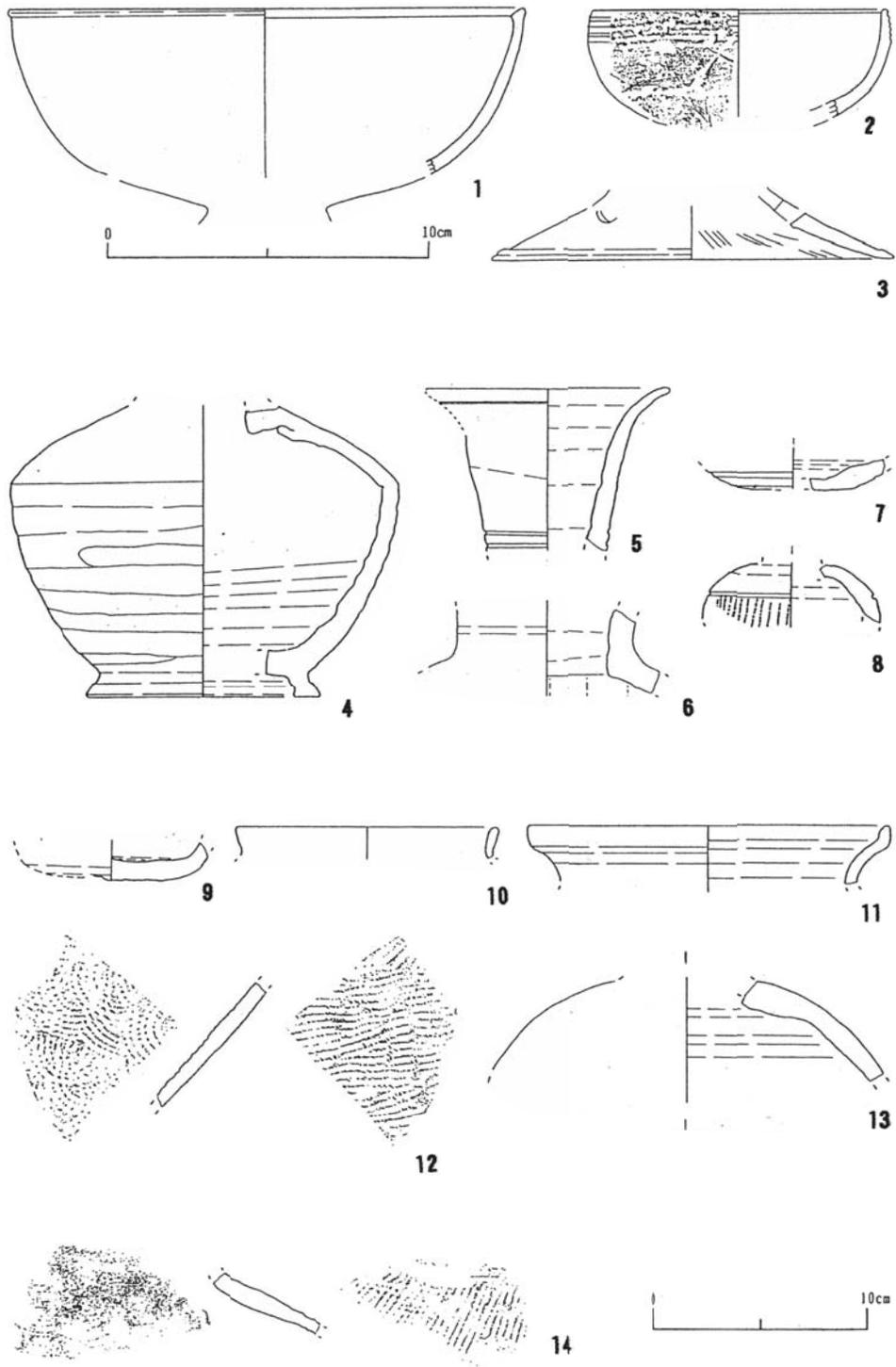


図3 伊瀬栗地遺跡出土遺物実測図 (1~3: 弥生式土器、4~14: 須恵器)

査の必要性を伝える。その後開発側と教育委員会の間で意思の疎通を欠くこともあったが、新たな古墳群の存在が明らかになり、調査が行われた。9基の古墳があると思われたが、発掘を進めた結果、古墳は7基、古代の遺構1基となった。

古墳群そのものについての詳細は報告書に譲り<sup>(6)</sup>、ここでは古代の遺構について述べる。3号墳の周溝に接するように作られ、長径2mほどの不正円形の浅い皿状を呈し、礫を伴って灰釉の短頸壺、碗、皿類が出土した。通常こうした遺構は、短頸壺を蔵骨器と見なし、墓とすることが多い。ただ調査者は、短頸壺と碗皿類の依存率の釣合が取れないことから、墓ではなく密教儀式との関連を指摘している<sup>(7)</sup>

古墳群は7世紀代の後期古墳で、古代の遺構は11世紀頃と考えられる。この古墳群の石室内外の遺物の時間差は、短いもので半世紀、長いもので2～4世紀に及ぶ。このことは横穴式石室への追葬の有無はともかく、古墳の高まりを含め、この一帯が相当長期間にわたり、ある種の聖域として認識されていたことを示している<sup>(8)</sup>。

### 3) 美濃加茂市仲坂古墳

先の池奥古墳群と同じゴルフ場開発の用地内を事前に踏査していたところ、独立した丘陵の頂部に高まりがあり、その上に「山神」と刻まれた石碑が建っていた(写真1)。

そのため「塚」としての認識に基づき調査を進めたところ、高まりの下から後期古墳の横穴式石室が姿を現してきた。石室内からは、6世紀前葉、6世紀中～後半、7世紀の前半の、3時期に分かれる須恵器が出土しており、2度の追葬が伺える。さらに塚の周囲から13世紀前半の遺物が見つかり、最終的には「山神」の塚となっている。古墳が、その後信仰の場として転用された。

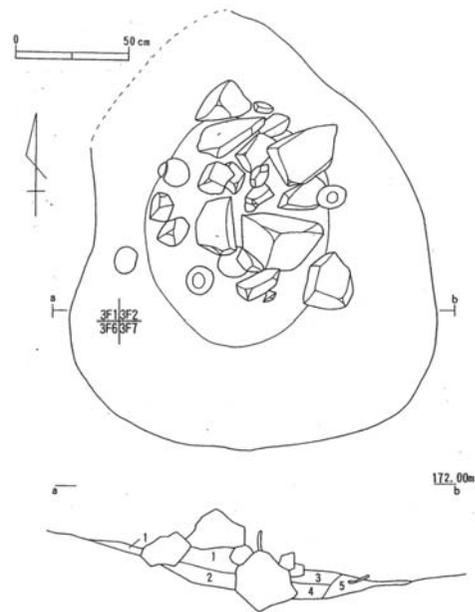


図4 池奥古墳群内古代遺構



写真1 仲坂古墳上の石碑 (1996.1.27)



写真2 高塚古墳近景 (2009.1.16 南東から)

#### 4) 北名古屋市高塚古墳

本古墳は、愛知県北名古屋市鍛冶ヶ一色襟 75 番地、本学西キャンパスの北西へ直線で約 1.1km 程に位置する。1988 (S63) 年、トレンチ法による試掘調査が行われ、以後 1989 (H1) 年に墳丘の測量、翌 1990 (H2) 年に周溝部の確認調査、さらに 2008 年から 2009 (H21) 年にかけてさらなる確認調査が行われた。詳細は報告書に譲る<sup>(9)</sup>。

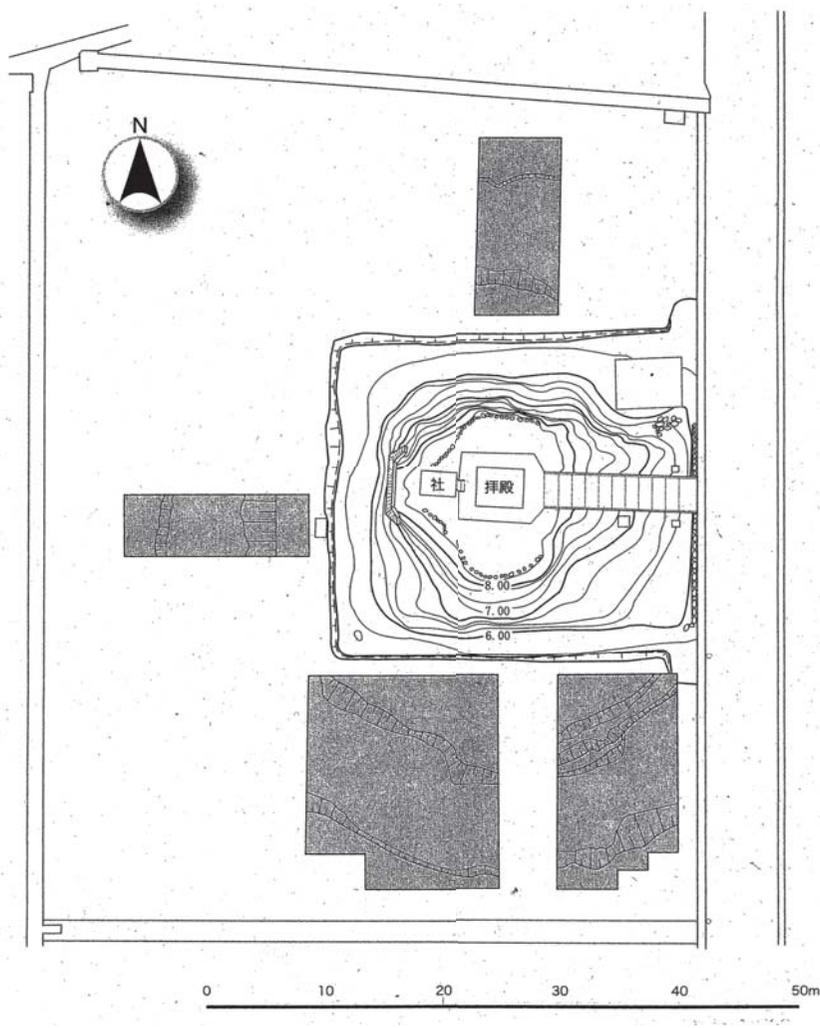


図5 高塚古墳平面図

その報告書によれば、江戸時代（天保年間頃か？）の村絵図に「天王塚」の名称で、円形の小丘が描かれており、古くから古墳として認識されていた。また、現在、本古墳上には須佐之男社が祀られている。宝暦年間（1750年代）まで遡る棟札が残されていることから、古くから人々の信仰の対象になってきたことが窺える。このことが古墳の保護につながったと指摘されている<sup>(10)</sup>。

墓としての古墳の高まりが、近世以降、神の依り代としての神社に転用された。

#### 4 愛知県史に見る遺跡の再利用と転用

これまで見てきたように、遺跡の再利用はお墓である古墳が古代や中世の墓域とされることが多い。両者の間には時間的な隔たりがあり、血縁や同属関係をたどることはできず、時を超えて同じ場が「墓」として再利用された。転用としては、これまた古墳の墳丘上もしくはその回りに神社が祭られる例がある。葬送も祭りの一種といえるが、古墳時代の祭りと神道系の祭りは直接結びつかないと考え、再利用ではなく「転用」とする。

遺跡の再利用や転用の実状を知るため、『愛知県史 資料編1～4 考古1～4』<sup>(11)</sup>の遺跡位置図や遺跡立地解説文を手がかりに、探っていく。なお、県史に掲載されている遺跡は各時代の代表的なものであり、愛知県内にある数千の遺跡のほんの一部に過ぎないが、おおよその傾向は知ることができると考える。

##### 1) 第1巻 旧石器・縄文

この巻では旧石器時代と縄文時代合わせて269遺跡掲載されている。県内ではもともと旧石器時に関しては石器の単独採集が多く、場としての再利用や転用は考えにくい。ここでは、県史に掲載されている縄文時代の244遺跡について検討した。

第1巻では、遺跡の位置を5万分の1の地図上に径5mmの丸印で表記しており、実測値では径250mとなる。具体的にはこの地図上の円内もしくは円に近接する所に、神社仏閣の地図記号（卍・卍）がある遺跡を選び出した。

その結果、円内に神社仏閣がある遺跡は19か所、円に近接する遺跡は16か所ある。その遺跡の性格をもう少し詳しく見ると、一般的な集落遺跡が14か所、貝塚遺跡が20か所、その他1か所となり、貝塚が全体の6割近くを占める。県内の縄文時代の遺跡全体に占める貝塚遺跡の割合から見れば、その比率は極めて高い。

また、神社と仏閣の数は、貝塚の直上ないし100m以内では、神社18か所、仏閣3か所と、圧倒的に神社が多い。一方近接地では神社が6か所に対し、仏閣が10か所と多くなる。このことは、遺跡の中心寄りに神社が多く、仏閣はやや離れる傾向を示す。もしかすると、場の再利用として神社が遺跡、特に貝塚を意識的に選ぶのに対し、仏閣は偶然近付いただけかもしれない。

##### 2) 第2巻 弥生

弥生時代は353遺跡掲載されてる。地図上で遺跡と神社仏閣の記号の位置関係を調べる

のは難しく、わずか8か所しか確認できなかった。しかもそのうち4か所は第1巻の縄文時代でも取り上げられており、弥生時代単独は半数に過ぎない。これは、縄文時代の貝塚や古墳時代の古墳が後世地表からでも目につき易いのに対し、弥生時代の遺跡の多くが地下に埋もれて目につきにくいことと関係がある。なお、8か所すべて神社である。

### 3) 第3巻 古墳

古墳時代では253遺跡が掲載され、単独古墳や古墳群が189か所、64遺跡が集落他である。墳丘もしくはその裾回りに神社仏閣があるのは45か所、掲載数の約4分の1に当たる。そのうち7か所が仏閣で、大部分が神社である。この他に、岡崎市内で第二次世界大戦中の防空監視所が、墳丘上に設置された例もある。また、転用が見られる古墳は尾張部が掲載数のうちの7割強を占め、三河部は少ない。これが地域差なのか、要因はわからない<sup>(12)</sup>。なお、神社では、白山神社、神明社、稲荷社の名が複数見られる。

古墳の墳丘上に社が多く見られる第一の要因は、目立つことである。そもそも古墳は丘陵先端部や平地であっても、周囲から一段高くそびえており、神の依り代にふさわしい。

### 4) 第4巻 古代

古代では、官衙・寺院・瓦窯、集落・生産・墳墓・その他合わせて286遺跡掲載されている。古代以降は、遺跡が大規模で複雑になり、性格のわからない遺構が増える。このため、どこまでが再使用や転用であるか、判断が難しい。そんな中、比較的わかりやすい墳墓、祭祀にかかわる再利用や転用は7例あった。

再利用としては、犬山市蓮池2号墳（6世紀代）の横穴式石室に、8世紀代の石製蔵骨器が納められていた例がある。また、豊橋市滝の平C2号墳（終末期、7世紀末）には、8世紀中ごろの蔵骨器が納められていた。

転用としては、愛西市川田遺跡や安城市二子山古墳の周溝が、古代に水路に転用されそこで水辺の祭祀が行われていた。また、名古屋市熱田区の高蔵遺跡では、弥生～古墳時代の方形周溝墓や古墳が見られるが、古代には生活址となっている。ただこの時、方形周溝墓は削られるものの、古墳はそのまま残されている。豊田市江古山遺跡（弥生～古墳時代中頃）の墓域が、7世紀末に生活址や祭祀の場となっている。おそらくこの他にも類例は多数あると思われるが、全体像は把握できない。

## 5 まとめ

「はじめに」でも触れたように、日本列島は急峻な山が直接海に接する所が多く、扇状地や沖積平野も地形が安定するまでは生活に適さず、河岸段丘上など住環境の快適な場所は限られている。そのため、例えば、遺跡台帳に「縄文時代」と記されていても、縄文時代の遺物以外一切見つからないのではなく、多かれ少なかれ他の時代の遺物が混在している。これは、主たる遺物（利用年代）が縄文時代というだけで、条件の良い場所は他の時代にも繰り返し利用されたことを示している。それ以上に、現代人の生活や生産活動と重

なることは珍しくなく、今も全国各地で開発に伴う発掘が数多く行われている。本稿では、こうした日常生活の再利用ではなく、非日常の転用や再利用についてみてきた。

可児市長塚古墳、同次郎兵衛塚1号墳、御嵩町伏見大塚では墳丘が中世の墓域として再利用された。一方、美濃加茂市伊瀬粟地遺跡では、弥生時代に作られた台状墓の高まりで、その後古代に数回須恵器を伴う祭祀が行われた。同池奥古墳群では中世の祭祀が、同仲坂古墳では近世の山神が祀られ、北名古屋市の高塚古墳には神社が祀られるなど、墓としての古墳が祭祀の場として転用されている。

また愛知県史で見たように、貝塚や古墳の上に様々な神社が乗る例は多い。いずれも再利用された時点で、その高まりが利用者の目に触れていたことは間違いない。ただ、他にも目についたであろう高まりの中からなぜそこが選ばれたのか、そうした心のありようはいくら発掘しても出てこない。時代を超えて人を引きつける何かがあった、と言ってしまうは簡単だが、実証科学を自認する考古学に関わる者の一人として、それは許されない。

ところで、桜井準也は『歴史に語られた遺跡・遺物』の中で、古墳再利用の意味を検討している。12世紀前半に成立した『今昔物語』に始まり、石部正志、間壁葎子、向坂鋼二、渡邊邦雄ら多くの先行研究を紹介している。その中で紹介されている土井光一郎の見方が興味深い。土井によれば、奈良県内の横穴式石室の再利用のされ方が、12世紀前半代では祭祀の場として利用されていたのに対し、13世紀中葉段階以降は墓地として再利用されている。その背景として、前者の時期には在地性の極めて高い住民によって石室が祖先の墓であるという意識があったため、墓を暴いたという触穢に対する忌避作用により祭祀行為（追善供養）が行われたと推定し、後者の時期には在地支配者（新興武士勢力）が進行してきたため、忌避意識のない新支配者によって墓地として使用されるようになったとしている<sup>(13)</sup>。果たしてこの指摘が岐阜県内の事例にも当てはまるか、もう少し資料の吟味が必要であろう。先祖の墓であるという認識の継承と断絶、出土資料からそれを見極めるのは、難しい問題である。また、神仏習合からの視点も必要となる。

## おわりに

今、パワースポットなる場所を巡るのが、一つのブームになっている。貝塚や古墳の上になぜ神社が乗せられるようになったのか、神社の由緒書を詳細に分析する必要がある。創建年代はより古く遡らせる傾向があり、そのまま鵜呑みにすることはできないが、背景を探る手がかりにはなる。神社の選地規準は何か、考えなければならない。

今回もまた、美濃加茂市民ミュージアム藤村俊学芸員には、情報収集に際し大変お世話になりました。豊田市教育委員会文化財課森泰通氏、熱田神宮文化殿野村辰美氏にも貴重な意見を伺いました。それらを十分生かし切れなかったことをお詫びするとともに、記してお礼申し上げます。

## 注

- (1) 「転用」、「再利用」、「再資源化」の各用語については、前号拙文中に引用した、領塚正浩、平田哲生らの考えに従う。ここでは場の利用について、当初の姿をあまり改変することなくほぼ同じ目的で使うのを「場の再利用」とし、あまり改変することはないものの別の目的で使うのを「場の転用」とする。なお、場に関してはモノの様に構成要素を素材段階までバラバラにして、まったく別の目的に再構成して利用することは考えにくいので、ここでは「場の再資源化」は検討対象とはしない。
- (2) 可児市教育委員会『前波の三ツ塚 国指定史跡長塚古墳整備事業に伴う発掘調査報告書』、岐阜県可児市、1999年。
- (3) 可児市教育委員会『川合遺跡群 〈本文編〉』、岐阜県可児市、1994年。
- (4) 御嵩町教育委員会『伏見大塚1号古墳発掘調査報告書』、岐阜県可児郡御嵩町、1983年、p3-4
- (5) 美濃加茂市教育委員会『伊瀬粟地遺跡発掘調査報告書』、岐阜県美濃加茂市、1194年。
- (6) 美濃加茂市教育委員会『池奥古墳群・仲坂古墳発掘調査報告書』、岐阜県美濃加茂市、1996年。
- (7) 前掲注6文献、p-29。
- (8) 前掲注6文献、p-33。
- (9) 北名古屋市歴史民俗資料館『高塚古墳』、愛知県北名古屋市、2010年。
- (10) 前掲注9文献、p5。
- (11) 愛知県史編さん室『愛知県史 資料編1 考古1 旧石器・縄文』、2000年。同『資料編2 考古2 弥生』、2003年。同『資料編3 考古3 古墳』、2005年。同『資料編4 考古4 飛鳥～平安』、2010年。
- (12) このことに関し、豊田市教育委員会文化財課森泰通氏は、尾張部は平野が広く、地表の高まりである古墳が目立ち、神社の設置場所として選ばれたのではないか。その点、三河地方は丘陵が発達しており、あえて人工の高まりである古墳の上を選ばなくてもよかったのではないか、とのことである。
- (13) 桜井準也『歴史に語られた遺跡・遺物 - 認識と利用の系譜』、慶応義塾大学出版会株式会社、東京、2011年。

## 挿図出典

- 1 前掲注3文献、p13。
- 2 前掲注5文献、p47。一部加筆。
- 3 前掲注5文献、p16・30。
- 4 前掲注6文献、p30。
- 5 前掲注9文献、p6。

## 追記

初校の校正中に、贅元洋氏より「日本最古とされる愛知県豊橋市水神第2貝塚出土のイモガイ製貝輪について」（『三河考古 第21号』、2011.5）をご患与頂いた。この中で氏は、縄文時代晩期に形成された貝塚上で、弥生時代後期に葬送儀礼に関する祭祀が行われた可能性を指摘している。場の転用の一例に加えたい。